

大川悦生 / 原作 教科書にも載っている同名著書のアニメ化！
子を思う親の愛を感動的に描き、戦争の悲劇、平和の尊さを訴えます。

文部省選定

おがあさんの木

© 東映



東映株式会社 教育映像営業部

〒104 東京都中央区京橋2-4-12 ☎03-272-5191

FAX.03-273-7949

あれから40年余りたった今でも、わたしの耳には、あのころの母の言葉と声が聞こえる。苦勞して育てた息子たちが、みな戦争で奪われてしまう瀬戸際に立たされたとき、母は「非国民」といわれかねない本音を、ちゃんと子どもに話してくれた。『おかあさんの木』のなかの、おかあさんのセリフは、そのままわたしの母たちの言葉だった。

小学校5年の『国語』に採用されていることもあって、毎年、全国各地からたくさん感想文や手紙が送られてくる。そんななかで、「このおかあさんは、ほんとに子どもを愛していたんですね。だから、きりの木の葉っぱだけ見ても、どの子の葉か分ったかだと思います」という文が心に残った。

わたしの最初の創作短編集『おかあさんの木』（ポプラ社）初版が出たのは、もう16年前である。わずかに10枚の話が、これほど生きつづけ、映画にまでなるとは想像もしなかった。しかし、子どもを愛する親なら、子どもの未来を心配する。核戦争・核の冬などの危機がなくなる限り、わたしたちはやはり、親の責任・おとなの責任として、戦争の悲劇と平和へのねがいを伝えつづけたと思う。

あらすじ

昭和12年、中国との間に起こった戦争はとうとう世界中を相手にするような大戦争へ広がって、男ばかり7人の子どもを持ったお母さん一家にも戦争の荒波が押し寄せて来た。

大きくなった息子たちは、陸軍だの海軍だのへと次々に兵隊にとられて行く。自分の手足をもがれるような思いで子どもたちを見送ったお母さんは、そのたびに裏の空地にキリの木の苗を一本ずつ植え、一郎、二郎、三郎と名前もつけた。そして「一郎、おはよう。二郎、おはよう。三郎、ひきょうな真似はせんと、お国のために手柄をたてておくれ」と毎日話しかけた。葉でもむしられていようものなら息子の身の上を心配し、北風が吹けば「風邪などひくな」と励まし、大事に育てた。息子たちのキリの木は、四本に増え五本に増えて、すっくらと伸びた。

その間、お母さんは、降っても照っても毎朝一本ずつキリの木を見上げ、みんな無事かな、けがはないかなと声をかけるのだった。

そんなある日、お母さんは一郎が中国大陸で名誉の戦死をとげたという知らせを受けた。しかし、お母さんはじつとこらえ「お国のお役にたてて嬉しゅう思います」と言い、人前では涙一つこぼさなかった。だが葬式がすんで親類や近所の人々が帰ってしまうと、お母さんは一郎の木に頬ずりをしながら泣き崩れた。それ以来、キリの木に話しかけるお母さんの言葉は「一郎みたいに死んだらいかん。手柄なんかたてんでもいい、生きて帰っておくれ」と、すっかりかわった。それを聞いて「非国民と言われるよ、きいつけなされ」と耳打ちする人もいたが、お母さんは息子たちのキリの木を大事に育てた。ある時は、一郎の写真を抱きしめて、「戦争で死なせるためにお前たちを生んだのではない」と語りかけ、「みんなの息子や父さんたちを死なせ外国の町や村をとって何んのいいことがある。早く戦争をやめて仲直りすればいい」とやりきれない思いで暮らしていた。戦死した一郎がかわいそうでならず、ほかの息子たちのことも心配でならなかったのだ。

裏庭にはいつやら七本のキリの木がすっくらと伸びたが、あべこべにお母さんの腰は少しずつ曲っていった。そしてお母さんの願いもむなしく、二郎は日本が全滅した南の島で、三郎は船と一緒に海の底に沈み、四郎はガ

ダルカナルで戦死、五郎はビルマのジャングルで行方不明、六郎は沖縄で戦死、七郎は飛行機で敵艦に体当りを敢行、壮絶な最期をとげたと言う。東京や大阪は丸焼けになり、広島・長崎に原爆が落ち、数え切れないほどの人が死んで、日本は戦争に負けた。

お母さんは「一人だけでいいから、かえして下さい」と祈り、「日本中の父さん母さんが弱かったんじゃ、みんなして息子を兵隊にやらん、戦争はいやだと一生懸命言っていたら、こうはならなかったろうに」と嘆いた。

秋が来てキリの葉が散り始めると、「これは一郎の葉、これは二郎の葉」と一枚一枚拾っては焚火にくべ息子たちの帰りを待った。けれど誰一人帰ってこないで一年が過ぎ、寒い冬がきた。いつやらお母さんの目はかすみ、ほほはこけ、腰もすっかり曲がってしまった。

そんなある日、何の前ぶれもなく、ビルマで行方不明になっていた五郎が杖をつきながら帰って来た。だが家の中はひっそりとしていて返事もない。不思議に思った五郎が裏庭にまわると手にキリの葉を握って母が五郎の木にもたれてうずくまっていた。

「お母さん！五郎がいま生きて帰ってきましたよ」と、五郎は思わす母を抱きしめたが、いくら呼んでも、ゆすっても、もはやお母さんはこの世の人ではなかった。

しばらくして五郎は母の思い出にクルミの苗を植えた。クルミは立派に育ち、毎年甘い実をたくさんつけた。その実を子どもたちがとって食べる時、五郎は、いつも「おばあちゃんがしてくれたように、私はもう二度と、お前たちのためのキリの木は植えたくないのだ」と話すのだった。それから、又、月日がたつて、五郎はおじいさんになったが、クルミの実がなると、やはり、孫たちに繰り返し、繰り返し、同じ話を聞かせるのだった。

製作——東映株式会社教育映画部

協力——スタジオ・ジュニオ

企画…河田富三郎 美術…影山勇
 脚本…矢吹公郎 撮影…玉川芳行
 監督…香西隆男 音楽…木下忠司
 作画…香西隆男

声の出演

ナレーション…武藤礼子 四郎(子供時代)…頓宮恭子
 おかあさん…中西妙子 五郎(")…山田栄子
 五郎(青年時代)…古川登志郎 七郎(")…三田ゆう子

●お買い上げは……

北辰映像株式会社

〒350-0461 埼玉県入間郡毛呂山町中央 3-32-3
 TEL:049-298-5792 FAX:049-298-5793
 E-mail : co@hokushineizo.com

関東営業所 東京都中央区京橋2-4-12 〒104 ☎ 03-272-5191
 新潟出張所 新潟市東区通前町六番町 〒951 ☎ 0252-22-3091
 関西営業所 大阪市北区曽根崎新地1-13-22 〒530 ☎ 06-345-9026
 広島出張所 広島市中区八丁堀16-10 〒730 ☎ 082-221-0505
 高松出張所 高松市丸ノ内11-14 〒760 ☎ 0878-51-3766
 中部営業所 名古屋市中区錦3-24-3 〒460 ☎ 052-971-0923
 九州営業所 福岡市博多区博多駅中央街5-12 〒812 ☎ 092-473-8541
 東北営業所 仙台市一番町4-2-10 〒980 ☎ 0222-22-7613
 北海道営業所 札幌市中央区南一条西7-4 〒060 ☎ 011-231-1439